

## VI) 情報の提供、諸報告に関する事項

### 1. 情報の提供方法及び提供先

#### 1) 郵送（\*印は注意報のみ）

##### ○国関係

\*農林水産省 消費・安全局植物防疫課、\*同中国四国農政局 消費・安全部 安全管理課植物防疫係、同島根農政事務所(統計部、地域第一、二課)、気象庁松江地方気象台。

##### ○独立行政法人

農業環境技術研究所、農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所、同果樹研究所ブドウ・カキ研究拠点、同野菜茶業研究所、同近畿中国四国農業研究センター。

##### ○他県関係

\*鳥取、\*岡山、\*広島、\*山口、\*徳島、\*香川、\*愛媛、\*高知、各県担当課。

##### ○県内関係

農業技術センター、島根県立松江農林高等学校、同出雲農林高等学校、同邇摩高等学校、同矢上高等学校、同益田翔陽高等学校、同図書館、病虫害防除員(果樹)。

##### ○県内団体

島根県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会島根県本部、農業振興協会、島根県農薬卸商協会。

##### ○報道機関

朝日、山陰中央、サンケイ、島根日日、中国、毎日、読売 各新聞社出雲支局（出雲市役所記者室）、NHK松江放送局、同出雲通信部、山陰放送、同ラジオ総局、山陰中央テレビ放送局、同出雲通信部、日本海テレビ、同出雲通信部。

#### 2) F A X

##### ○県内関係

島根県農林水産部 農業経営課、同農畜産振興課、同食糧安全推進課、東部、西部農林振興センター各農業普及部（松江、浜田、安来、中海干拓、雲南、出雲、県央、大田、益田）、隠岐支庁 農業普及部、同島前地域振興グループ、中山間地域研究センター、農業大学校、各市町村、各病虫害防除員（水稲）、浜田農林業支援センター。

##### ○報道機関

日本農業新聞松江支局、同中国四国支所、出雲ケーブルテレビジョン、石見ケーブルテレビ、鹿島ケーブルテレビ。

#### 3) メール

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター、県内各農業共済組合。

#### 4) ホームページ

発生予察情報（発生予報、特殊報、注意報、臨時情報）。

技術情報（技術資料、葉いもち情報、ウンカ情報、縞葉枯情報、果樹カメムシ情報、カキ フジコナカイガラムシ情報）

## 2. 発表状況

### (1) 発生予察情報の発表状況

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報	9回	240部	<p>○イネ 葉いもち2回、穂いもち3回、紋枯病4回、白葉枯病3回、縞葉枯病2回、萎縮病1回、黄化萎縮病1回、ヒメトビウンカ4回、ニカメイチュウ4回、ツマグロヨコバイ5回、イネドロオイムシ1回、イネミズゾウムシ4回、セジロウンカ3回、トビイロウンカ3回、コブノメイガ3回、斑点米カメムシ類3回。</p> <p>○ムギ うどんこ病3回、赤かび病3回、さび病類3回。</p> <p>○ダイズ ハスモンヨトウ2回。</p> <p>○ナシ 黒斑病7回、黒星病4回、シンクイムシ類6回、ハマキムシ類3回、ハダニ類7回、アブラムシ類2回、カメムシ類2回。</p> <p>○カキ 円星落葉病1回、うどんこ病3回、灰色かび病1回、カキミガ3回、チャノキイロアザミウマ1回、カメムシ類4回、カキクダアザミウマ2回。</p>

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
			○果樹全般 カメムシ類 2回。 ○キャベツ 黒腐病 2回、菌核病 2回。 ○アブラナ科野菜 コナガ 2回、ハスモンヨトウ 2回。 ○タマネギ ボトリチス属菌による葉枯れ 3回、べと病 3回、腐敗病・軟腐病 3回、白色疫病 1回。 ○イチゴ 灰色かび病 2回、アブラムシ類 2回。
特 殊 報	1 回	2 5 0 部	○プルーン：リンゴサビダニ 1回
注 意 報	3 回	2 5 0 部	○タマネギ：べと病 1回 ○果樹：カメムシ類 1回 ○アブラナ科野菜、ダイズ、ソバなど：ハスモンヨトウ 1回
臨時情報	3 回	2 3 0 部	○カキ：灰色かび病 1回 ○チャ：ミカントゲコナジラミ 1回 ○ナシ、すもも、プルーン：果樹カメムシ類 1回
技術資料	1 回	2 4 0 部	○トマト：トマト黄化葉巻病 1回 ○「オキシリニック酸剤」耐性イネもみ枯細菌病菌 1回

### 3. 発表内容

#### 1) 特殊情報

(1) 第1号 (平成22年12月16日)

1. 病虫害名 : リンゴサビダニ *Aculus schlechtendali* (Nalepa)

2. 発生物種 : プルーン

3. 発生確認場所: 雲南市

#### 4. 発生確認の経緯

1) 平成22年6月雲南市のプルーン圃場において、新梢にサビダニの被害と思われる害虫が発生しているとの報告を受けた。現地調査を実施した結果、サビダニ及びその被害と思われる褐変葉が認められた。そこで、本虫を含む被害葉を採取し千葉県農林総合研究センター上遠野富士夫博士に同定を依頼したところ、リンゴサビダニと判明した。

2) 本虫は栽培種ではリンゴなどの *Malus* 属を加害するが、プルーンでの被害は初めてである。

#### 5. 形態及び生態

成虫の体色は淡黄～橙黄色。体長は約0.2mmの微小なダニで、雄は雌よりやや小型で、ルーペでは形態的にほとんど区別できない。微小であるため肉眼での確認は困難である。

芽や粗皮下で越冬し、開花期頃から葉上に移動して増加する。最初は果そう葉に多くみられるが、やがて徒長枝の上位葉に多く寄生するようになる。著しく加害された葉は褐変し早期落葉する。

#### 6. 被害の特徴

新梢や徒長枝では先端から5葉までに寄生が多い。著しく加害された葉は褐変するとともに表側に巻葉し時には早期落葉を引き起こす。

#### 7. 寄主植物

本種の主な寄主植物はリンゴなどの *Malus* 属である。

#### 8. 防除対策

1) 被害枝を剪定等により切除し越冬密度を低下させる。

2) 冬期に石灰硫黄合剤の20～40倍を散布する。



リンゴサビダニによる被害



リンゴサビダニ

## 2) 注意報

### (1) 第1号 (平成22年4月5日)

タマネギべと病の越年罹病株が県内各地で認められ、発病株率の極めて高い圃場も確認されています。今後気温の上昇に伴い、越年罹病株上には多数の胞子が形成され、病勢の急速な進展が懸念されますので、注意報を発表します。

現地では発生状況を把握し、**発病株の抜き取り**等、防除対策の徹底をお願いします。

### 記

1. 作物名       タマネギ
2. 病害虫名   べと病
3. 発生地域    県内全域
4. 予想発生量  多い
5. 注意報発表の根拠

- 1) 3月下旬の巡回調査では、越年罹病株の発生圃場率が73.3%(平成14.3%)と平成を上回っており、1万株当たりの発病株数は18.9株(平成2.0株)と過去10年間で最も多い。
- 2) 越年罹病株には今後胞子が多量に形成され、これが伝染源となり、急激な二次感染が起こることが予想される。

- 3) 今後の気象は本病の発生を特に抑制する要因とはならない。

### 6. 防除対策および防除上の注意事項

- 1) 一般的に、越年罹病株が1万株当たり1株(10a当たり3株程度)以上あるとまん延に十分な量の胞子が形成され、二次感染が活発化し、鱗茎肥大期には多発生になるとされる。
- 2) 逆に、越年罹病株の早期除去によりまん延の防止が可能となるので、抜き取りを徹底する。
- 3) 越年罹病株に胞子の形成が認められた場合には、感染拡大防止のため、直ちに薬剤による防除を行う。

### 7. 薬剤防除

#### 1) 種類および濃度

(薬剤名)

- \*リドミルMZ水和剤 500~750倍
- \*リドミル銅水和剤 400~600倍
- \*フォリオブラボ顆粒水和剤 1,000倍
- フェスティバルM水和剤 750~1000倍
- フェスティバルC水和剤 600~800倍
- ランマンフロアブル 2,000倍
- アミスター20フロアブル 2,000倍
- ホライズンドライフロアブル 2,500培
- カーゼートPZ水和剤 1,000倍

(使用基準)

- 収穫 7日前まで/3回以内
- 収穫 7日前まで/4回以内
- 収穫 前日まで/4回以内
- 収穫 3日前まで/3回以内
- 収穫 3日前まで/3回以内



ベトファイター顆粒水和剤 2,000倍	収穫 7日前まで/3回以内
プロポーズ顆粒水和剤 1,000倍	収穫 7日前まで/3回以内
ダコニール1000 1,000倍	収穫 7日前まで/6回以内
**マンゼブ水和剤 400~600倍	収穫 3日前まで/5回以内
フロンサイド水和剤 1,000~2,000倍	収穫 7日前まで/5回以内
ヨネポン水和剤 500倍	収穫 7日前まで/5回以内
ビスダイセン水和剤 400~600倍	収穫21日前まで/3回以内

注) \*印の薬剤はフェニルアמיד系薬剤である。耐性菌を出現させないために、これら薬剤の連用および輪用を避ける。

\*\*印の薬剤名は一般名であり、該当薬剤は複数あることから、使用に当たっては登録内容をよく確認する必要がある。

なお、薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに本県農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

(参考)

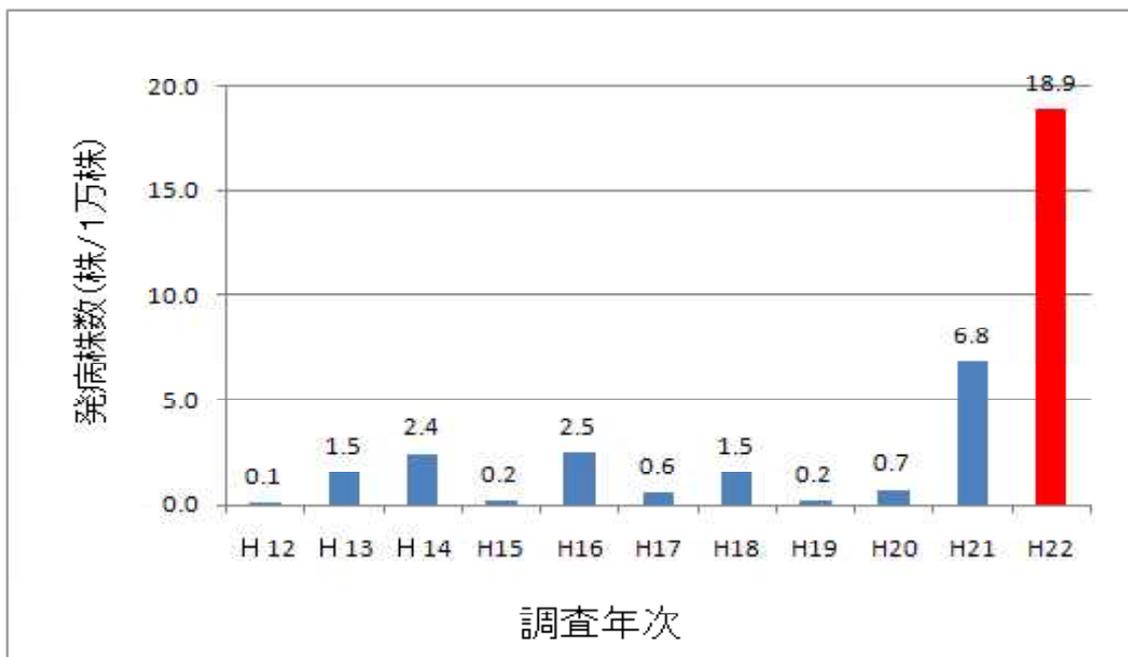


図 過去10か年のタマネギべと病越年罹病株の発生状況

(2) 第2号 (平成22年7月7日)

果樹を加害するカメムシ類の発生量が多く、カキ、ナシ、スモモなどで被害が多発生する恐れがありますので注意報を発表します。現地では発生状況の把握に努めるとともに、発生園では適切な防除対策を講ずるよう指導をお願いします。

記

1. 病害虫名 果樹カメムシ類
2. 発生地域 県内カキ、ナシ、スモモ栽培地帯
3. 発生時期 7月中旬～
4. 発生量 やや多い
5. 注意報発表の根拠
  - 1) 予察灯(出雲市)でのチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシの誘殺数は平年に比べ多く推移している。特に6月第3半旬から7月第1半旬の合計が883頭(平年値296.5頭)と多く誘殺された(第1図)。
  - 2) チャバネアオカメムシの集合フェロモン(出雲市)における誘殺数は6月第1半旬から7月第1半旬までの合計が993頭(平年値696.6頭)と急増し、今後果樹カメムシ類の飛来、加害が活発化すると考えられる(第2図)。
  - 3) 6月中旬にスモモ果実で被害を確認したが、ナシ・カキ果実での被害は確認していない。今後

カキや無袋栽培のナシなどで被害が発生する恐れがある。なお、有袋栽培のナシでも果実の肥大にともない果実袋を通して加害される恐れがある。

- 4) 本年はスギ・ヒノキの花粉の飛散が平年に比べ少なく、毬果は少ないと予想され果樹園への飛来が平年に比べ早くなると予想される。
- 5) ナシ（無袋）の摘果作業はほぼ終わっている。カキでは摘果作業が行われているが、果実の被害の有無に注意する。

#### 6. 防除対策および防除上の注意事項

- 1) 山間地や山沿いの園ではカメムシ類の発生加害が多いので特に注意する。
- 2) カメムシはスギ・ヒノキの毬果で増殖し、果樹園に移動するので付近のスギ・ヒノキについても観察する。
- 3) 薬剤の使用にあたっては、農薬使用基準ならびに本県農作物病虫害雑草防除指針を遵守する。

#### 7. 薬剤による防除

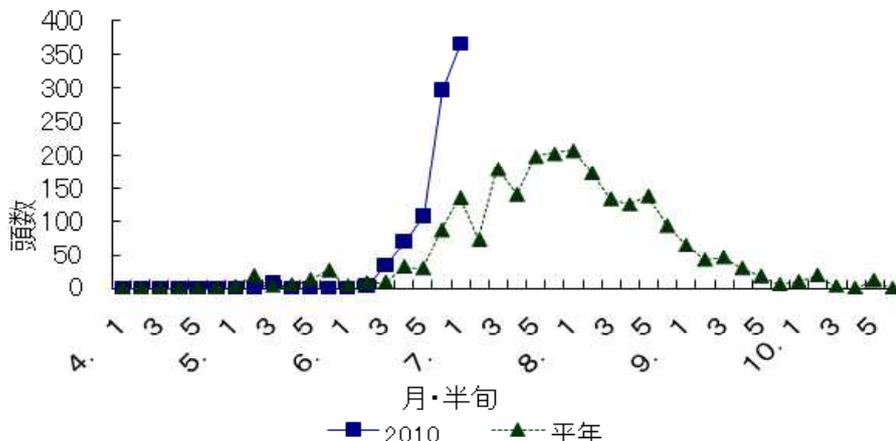
- 1) 種類および濃度使用基準（平成22年7月1日現在）

薬 剤 名	カ キ		ナ シ	
アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	3日前／3回		
アーデント水和剤	1,000倍	7日前／3回	1,000倍	7日前／3回
アグロスリン水和剤	1,000～2,000倍	前日／3回	1,000～2,000倍	前日／3回
アドマイヤー顆粒水和剤	5,000～10,000倍	7日前／3回	5,000～10,000倍	7日前／3回
アディオン乳剤	2,000～3,000倍	7日前／5回	2,000倍	前日／2回
ジノテフラン水溶剤(顆粒)	2,000倍	前日／3回	2,000倍	前日／3回
スカウトフロアブル	1,500倍	7日前／5回	1,500倍	前日／5回
スプラサイド水和剤	1,500倍	30日前／3回	1,500倍 (有袋)	7日前／3回 (無袋) 45日前／2回
スミチオン水和剤40	800～1,000倍	45日前／3回		
ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	7日前／3回	2,000～4,000倍	7日前／3回
テルスター水和剤	1,000～2,000倍	14日前／2回	1,000～2,000倍	前日／2回
ベストガード水溶剤			1,000倍	14日前／3回
MR. ジョーカー水和剤	2,000倍	14日前／2回	2,000倍	14日前／2回
マブリック水和剤20	2,000倍～4,000倍	30日前／2回	2,000倍	30日前／2回
ロディ水和剤	1,500倍	7日前／3回	1,000倍	前日／2回

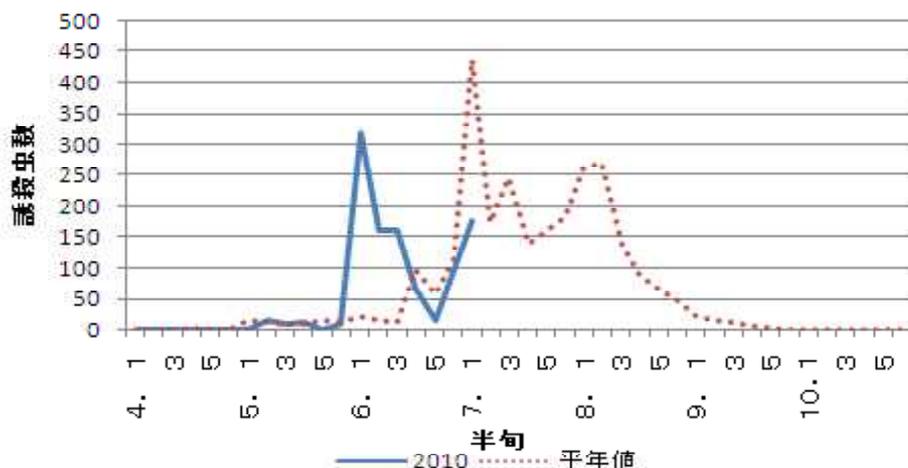
薬 剤 名	スモモ	
ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	3日前／3回
ジノテフラン水溶剤(顆粒)	2,000倍	7日前／2回

- 2) 散布時期および回数  
発生に応じて数回散布する。
- 3) 散布量：10 a 当たり 液剤300～400㍈。

(参考)



第1図 予察灯における果樹カメムシ類誘殺数



第2図 チャバネアオカメムシ集合フェロモントラップによる誘殺数

(3) 第3号 (平成22年9月17日)

キャベツなどのアブラナ科野菜やダイズ、ソバ等でハスモンヨトウによる被害が多発生することが予想されますので注意報を発表します。現地では発生状況の把握に努め、適切な防除対策を講じてください。

1. 病害虫名 ハスモンヨトウ
2. 発生地域 県下全域
3. 作物 アブラナ科野菜（キャベツなど）、ダイズ、ソバなど
4. 発生時期 9月中旬～
5. 発生量 やや多い～多い

6. 注意報発表の根拠

- 1) フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の累積誘殺数は平年並～やや少ないが9月2,3半旬の誘殺数は平年より多い(表1)。
- 2) 9月中旬の夏秋キャベツでの調査では寄生株率が平年に比べて高い(表2)。
- 3) 9月中旬のダイズでの調査では白変葉の発生が平年に比べて多く、発生圃場率が高い(表3)。
- 4) 現在、老齢幼虫も散見されるが、若齢幼虫が主体であり、今後幼虫の分散とともに寄生株率の上昇が懸念される。
- 5) 今後1ヶ月の気象は、気温は高く、降水量は平年並みと予想されており、本種の発生に助長的である。

7. 耕種法による防除

**ダイズ**

白変葉の発生に注意し、若齢幼虫を葉ごと切り取ってつぶす。

8. 薬剤による防除

1) 種類および濃度

**キャベツ、ハクサイ、ダイコン**

薬 剤 名	キャベツ	ハクサイ	ダイコン
	( 収 穫 前 日 数 / 総 使 用 回 数 )		
○有機リン系殺虫剤			
PAP乳剤 1000倍	14日 / 2回	21日 / 3回	30日 / 2回
レルダン乳剤25 1000倍	7日 / 4回	30日 / 2回	30日 / 2回
ホスパー乳剤 1000倍	21日 / 1回	30日 / 1回	30日 / 1回
アセフェート水溶剤 1000～1500倍	7日 / 3回	14日 / 3回	—
オルトラン水和剤 1000～1500倍	7日 / 3回	14日 / 3回	—
DDVP乳剤(75%) 1500～2000倍	3日 / 5回	7日 / 5回	14日 / 6回
トクチオン乳剤 1000倍	21日 / 2回	—	—
○IGR剤			
アタブロン乳剤 2000倍	7日 / 4回	7日 / 4回	14日 / 3回

カスケード乳剤 2000～4000倍	14日／2回	—	—
マッチ乳剤 3000倍	7日／3回	—	—
ファルコンフロアブル 2000～4000倍	7日／2回	—	—
カウンター乳剤 2000～3000倍	7日／3回	—	—
ノーモルト乳剤 2000倍	7日／2回	—	—
○カーバメート系殺虫剤			
ランネート45DF 1000～2000倍	3日／3回	—	—
ラービフロアブル 1000倍	—	—	21日／2回
ラービフロアブル 750～1000倍	7日／4回	7日／2回	—
ラービン水和剤75 1000～1500倍	—	7日／2回	—
デナポン5%ベイト (株元散布)	14日／3回	21日／3回	—
○BT剤 (農作物病虫害雑草防除指針参照)			
○ネオニコチノイド系殺虫剤			
モスピラン粒剤 0.5g/株(株元散布) 定植前日～定植当日／1回	—	—	—
○その他の殺虫剤			
アフアーム乳剤 1000～2000倍	7日／3回	—	—
ガンバ水和剤 1500倍	21日／2回	—	—
トルネードフロアブル 2000倍	7日／2回	—	—
マトリックフロアブル 2000倍	7日／4回	—	—
プレオフロアブル 1000倍	7日／2回	—	—
コテツフロアブル 2000倍	3日／2回	—	—
フェニックス顆粒水和剤 2000倍	前日／3回	前日／3回	—
プレバソソフロアブル5(散布) 2000倍	前日／3回	—	—
〃 (灌注) 100倍 育苗期後半～定植当日／1回	—	—	—

### ブロッコリー

薬 剤 名	(収穫前日数／総使用回数)		
○有機リン系殺虫剤			
PAP乳剤 1000倍	31日／2回		
DDVP乳剤(75%) 1500～2000倍	7日／6回		
○IGR剤			
ファルコンフロアブル 4000倍	14日／2回		
○その他の殺虫剤			
プレオフロアブル 1000倍	7日／2回		

### ソバ

薬 剤 名	(収穫前日数／総使用回数)		
○IGR剤			
ロムダンフロアブル 2000倍	21日／2回		
ロムダン粉剤DL	21日／2回		
○BT剤 (農作物病虫害雑草防除指針参照)			

### ダイズ

薬 剤 名	(収穫前日数／総使用回数)		
○有機リン系殺虫剤			
PAP乳剤 1000倍	7日／2回		
PAP粉剤2	7日／2回		
PAP粉剤3	7日／2回		
アセフェート水溶剤 1000倍	60日／3回		
オルトラン水和剤 1000倍	60日／3回		
ダーズバン乳剤40 1500倍	7日／2回		
トクチオン乳剤 1000倍	30日／3回		
○合成ピレスロイド剤 (農作物病虫害雑草防除指針参照)			
○IGR剤			
アタブロン乳剤 2000～4000倍	14日／2回		
ノーモルト乳剤 2000倍	14日／2回		
ロムダンフロアブル 2000倍	14日／3回		
ロムダンゾル 1000倍	14日／3回		
ロムダン粉剤DL	14日／3回		
カスケード乳剤 4000倍	7日／2回		
マッチ乳剤 3000倍	14日／2回		
ランナーフロアブル 2000倍	7日／2回		
○BT剤 (農作物病虫害雑草防除指針参照)			

- カーバメート系殺虫剤
  - ラービフロアブル 750～1000倍 14日／2回
  - ランネート45DF 1000～2000倍 14日／4回
- その他の殺虫剤
  - トルネードフロアブル 2000倍 7日／2回
  - マトリックフロアブル 2000～3000倍 前日／3回
  - フェニックス顆粒水和剤 2000倍 7日／3回
  - プレオフロアブル 1000～2000倍 7日／2回
  - プレバソソフロアブル5 4000倍 7日／3回

2) 散布量：10a 当たり液剤100～300 $\mu$ l、粉剤4kg、ベイト剤3～6kg

3) 散布時期・留意点

現在発生の多い圃場では直ちに散布する。その後は発生に応じて散布する。系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

4) その他の注意事項

- (1) 本種は上記の作物のほか花き類、ナス、トマト、ヤマイモ、ネギ、タマネギ、イチゴ、ブドウ、カキなど多くの作物を加害する。
- (2) 老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので若齢幼虫期に重点をおいて防除する。
- (3) 施設栽培ではハウスサイド、出入り口、天窓等の開口部に防虫のネットを被覆するなど、成虫の侵入防止に努める。
- (4) 農薬使用指導を行う場合は、必ず最新の「農薬登録情報」を確認する。

## 9. 付 表

表1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの雄成虫の半旬別誘殺数(頭)

調査地点	調 査 時 期									
	8 月						9 月			
	1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	1半旬	2半旬	3半旬	
出雲市	本年	11	9	77	100	33	79	12	316	271
	平年	56.6	63.5	86.0	67.0	74.8	113.6	131.5	212.9	173.8
益田市	本年	0	27	193	111	76	136	58	451	255
	平年	90.8	72.6	73.6	180.3	162.0	207.4	144.3	223.9	198.2

表2 ハスモンヨトウの発生状況 (夏秋キャベツ)

調査月日	寄生株率 (%)		発生圃場率 (%)
9月13日	本年	10.0	33.3
	平年	3.3	32.1

表3 ハスモンヨトウの発生状況 (ダイズ)

調査月日	1a当たり白変葉か所数		発生圃場率 (%)
9月13日	本年	4.2	95.0
	平年	2.0	42.9



図1 キャベツ葉上のハスモンヨトウ幼虫と卵塊(右上)



図2 ダイズの白変葉 (幼虫の初期被害)

3) 臨時情報

(1) 第1号 (平成22年4月30日)

カキの灰色かび病 (図1) が多く、今後の気象条件によっては病勢の急速な進展が懸念されますので、臨時情報を発表します。

現地では発生状況を把握し、防除対策の徹底をお願いします。

記

- 1. 作物名 カキ
- 2. 病害虫名 灰色かび病
- 3. 発生地域 県内全域
- 4. 予想発生量 多い



図1 葉での症状

5. 臨時情報発表の根拠

- 1) 4月下旬の巡回調査では、発病葉率が8.3% (平年0.7%) と平年を大幅に上回っており、過去10年間で最も多い (図2)。
- 2) 罹病葉には今後胞子が多量に形成され、急激な二次感染が起こる恐れがある。
- 3) 今後の気象は本病の発生を特に抑制する要因とはならない。

6. 発生生態と防除対策

- 1) 発生は主に展葉期～6月までみられ、被害としては早期落葉や果実表面に黒色の小粒点 (図3) ができ、果実品質が低下する。
- 2) 若い葉ほど発病しやすく、強風で葉が傷んだ場合や降雨が多い気象条件によって発病が助長される。
- 3) 品種の中では西条、伊豆が特に発生しやすい。
- 4) 強風によって葉が傷むと発病しやすくなるため、防風垣または防風ネットを設置することが重要である。
- 5) 発生が多く認められた場合には、感染拡大防止のため、直ちに下記薬剤による防除を行う。
- 6) 登録薬剤

(薬剤名)	(使用基準)
Getter水中和剤	1000～1500倍 収穫7日前まで/3回以内
オンリーワンフロアブル	2000倍 収穫14日前まで/3回以内
ストロビードライフロアブル	3000倍 収穫14日前まで/3回以内
フルピカフロアブル	2000～3000倍 収穫14日前まで/5回以内
フロンサイドSC	2000倍 収穫45日前まで/1回以内
ベルコート水中和剤	1000～1500倍 収穫14日前まで/3回以内
ポリベリン水中和剤	1000～2000倍 収穫30日前まで/3回以内

薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに本県農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

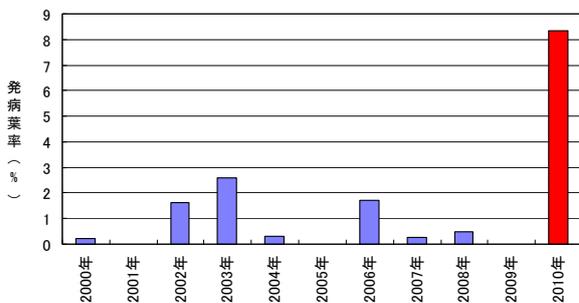


図2 過去10年間のカキ灰色かび病の発生状況 (4月下旬)



図3 果実での症状

(2) 第2号(平成22年6月7日)

チャのミカントゲコナジラミが新たに松江市、津和野町でも確認されました。今後発生地域の拡大が懸念されますので、臨時情報を発表します。

現地では早期発見に努め、防除対策の徹底をお願いします。

1. 病害虫名 : ミカントゲコナジラミ *Aleurocanthus spiniferus* (Quaintance)
2. 発生作物 : チャ
3. 発生確認場所 : 邑智郡、出雲市、松江市、津和野町
4. 臨時情報発表の根拠

1) 平成21年6月邑智郡のチャ園において、本種幼虫と思われる害虫が発生し久留米大学上宮健吉博士に同定依頼したところ、チャに寄生するミカントゲコナジラミと同定されたため8月に特殊報を発表した。その後、県内では出雲市のチャ園で発生を確認したが、その他の地域では確認されなかった。本年にはいり4月に松江市と津和野町で発生を確認した。いずれの圃場も本圃では発生が少ないものの幼木では多発生であった。なお、他県では平成16年に京都府で初めて確認され、その後、滋賀県、奈良県、三重県、福岡県、埼玉県、岐阜県、大分県で確認されている。本種の主な寄生植物はカンキツ類とされているが、チャに寄生するものは別系統とされている。

5. 被害の特徴

成虫及び幼虫による葉の吸汁加害と、幼虫・蛹の分泌物により夏季以降にすす病が併発し被害が発生する。また、一番茶摘採期と成虫の発生時期が重なると収穫作業者が吸引するなどして不快害虫としての一面も見られる。

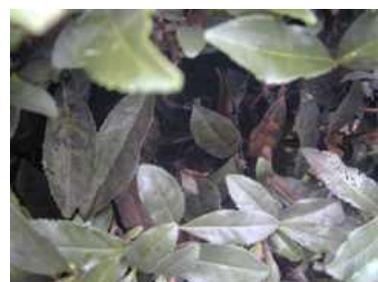
6. 防除対策

- 1) 本種の卵および若齢幼虫は微小であり、また葉裏に産卵・寄生するため発見が遅れ、成虫やすす病が発生するまで気が付かないことが多い。そのため定期的に茶園を観察し早期発見に努める。
- 2) 茶園の風通しを良くし卵・幼虫・蛹の寄生葉除去に努める。
- 3) 本種は卵から蛹までの期間は葉裏で固着生活することから整せん枝の時期や深さを工夫することで効果的に寄生葉を除去し次世代密度の抑制を図る。また、除去後の寄生葉は焼却もしくは土中に埋めるなど適切に処分する。
- 4) 放任茶園は本種の発生源になる可能性が高いので適切な管理を行い、発生拡大を抑える。
- 5) 薬剤で防除する場合は若齢幼虫発生期に散布する。
- 6) 発生地から苗を購入する場合は、寄生の有無に注意する。

農薬名	希釈倍率	使用時期	使用回数	成分の総使用回数
アプロード水和剤	1000倍	摘採14日前まで	2回	ブプロフェジン2回
アプロードエースフロアブル	1000倍	摘採14日前まで	1回	フェンピロキシメート1回 ブプロフェジン2回
ハチハチフロアブル	1000倍	摘採14日前まで	1回	トルフェンピラド1回
ダニゲッターフロアブル	2000倍	摘採7日前まで	1回	スピロメシフェン1回
ダントツ	2000倍	摘採7日前まで	1回	クロチアニジン1回



ミカントゲコナジラミ幼虫



ミカントゲコナジラミによる被害

(3) 第3号(平成22年6月7日)

果樹カメムシ類の誘殺数が6月に入り急増し、無袋栽培の果実に被害が懸念されますので、臨時情報を発表します。

現地では発生状況を把握し、防除対策の徹底をお願いします。

記

1. 作物名 ナシ・すもも・プルーン
2. 病害虫名 果樹カメムシ類
3. 発生地域 県内全域
4. 予想発生量 多い
5. 臨時情報発表の根拠

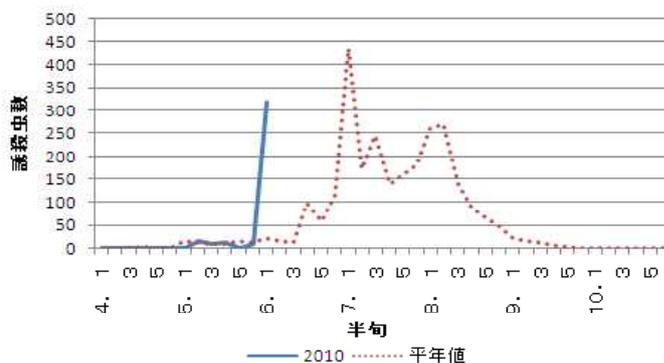
- 1) 6月第1半旬までのフェロモントラップへの累計誘殺数は426頭(平年99.7頭)と平年に比べて多い(図1)。
- 2) 現在、被害は確認されていないが、今後気温の上昇とともにさらに活動が活発となり、被害の発生が懸念される。
- 3) 今後の気象は本病の発生を特に抑制する要因とはならない。

6. 発生生態と防除対策

- 1) カメムシ類は気温が高く風が弱い夜に果樹園に飛来するので、ほ場での成虫の飛来を確認する。
- 2) カメムシは局地的に飛来し、集中的に加害する傾向がある。また、園地間差が大きいので、過去にカメムシ被害が多かった園では注意する。
- 3) 今後ヒノキ毬果に産卵増殖し毬果の劣化とともに果樹園へ飛来する。本年はヒノキ毬果は少ないため果樹園への飛来も例年より早いと考えられる。
- 4) チャバネアオカメムシに果実を吸汁されると幼果期には落下し、幼果期以降のナシでは加害部が陥没し品質が低下する。
- 5) 圃場でカメムシ類や被害の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。
- 6) 登録薬剤

	(薬剤名)		(使用基準)
ナシ	アドマイヤー水和剤	1000倍	収穫3日前まで/2回以内
	ジノテフラン顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで /3回以内
	スカウトフロアブル	1500倍	収穫前日まで /5回以内
	ダントツ水溶剤	2000~4000倍	収穫前日まで /3回以内
	テルスター水和剤	1000~2000倍	収穫前日まで /2回以内
すもも	MR. ジョーカー水和剤	2000倍	収穫14日前まで/2回以内
	ジノテフラン顆粒水溶剤	2000倍	収穫7日前まで/2回以内
	ダントツ水溶剤	2000~4000倍	収穫3日前まで/3回以内

薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに本県農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。



第1図 集合フェロモントラップによるチャバネアオカメムシの誘殺数の推移

#### 4) 技術資料

(1) 第1号(平成22年6月8日)

トマト黄化葉巻病の発生が県東部で新たに確認されました。昨年、益田市で県内初発生を確認して以来の発生となりました。本病の未発生地域では、県外の発生地域からの購入苗によって発生する可能性があり、その注意喚起のために技術資料を発表します。

疑わしい株があれば最寄りの普及部または病害虫防除所までご連絡をお願いします。

#### 記

1. 病害虫名 トマト黄化葉巻病(病原: トマト黄化葉巻ウイルス)
2. 作物名 トマト
3. 新たに発生した場所 県東部 1圃場(3a) 発病株率: 1%
4. 発生経過

平成21年9月、益田市のトマトにおいて、トマト黄化葉巻病が本県で初めて発生したため、10月に特殊報を発表した。本年5月、県東部の圃場で葉の黄化症状が発生し、診断した結果、トマト黄化葉巻ウイルスが検出された。発生は1棟のハウス(3a)のみで発生株率は1%であった。本圃場は、タバココナジラミの発生は確認されなかった。なお、苗は県外から購入しており、感染苗の可能性も考えられる。

#### 5. 被害

発病前に着果した果実は正常に発育するが、発病後の花は蕾のまま落下する 경우가多く、開花しても結実しないことが多い。

#### 6. 防除対策

##### 1) ハウスに入れない

- (1) 購入苗には注意する。
- (2) 全ての開口部に防虫ネット(目合い0.4mmが望ましい)を張る。出入り口のカーテンは二重にし開放状態にしない。
- (3) 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内及び周辺部に設置し、本虫の早期発見及び捕殺に努める。また、光反射マルチを施設周辺部に設置し侵入を防ぐ。
- (4) 野良生えトマトの処分をする。また、施設内外の雑草は定植の10日前までに除草する。

##### 2) 増やさない

- (5) 育苗時～定植時にネオニコチノイド系粒剤を施用したり、定植後に定期的な薬剤散布を行い、媒介虫を防除する。
- (6) 薬剤防除においては薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション散布や気門封鎖剤を併用する。
- (7) 発病株を見つけたら速やかに抜き取り、ビニール袋に入れ密封する。株が枯れ虫が死滅してから持ち出し土中に埋めるなど処分する。
- (8) 地域内でトマトの栽培が無い期間(1か月間程度)をつくり伝染環を断ち切る。

##### 3) ハウスから出さない

- (9) 栽培終了後、株は切断、抜根して枯死させた後、土中に埋める。また、同時に施設を密封して蒸し込む(40℃、10日以上)。

##### 4) 抵抗性品種について

- (10) 現在、市販されている抵抗性品種は発病が抑制されるが、ウイルスは感染し増殖源となる。感受性品種同様防除を実施する必要がある。



図1 株の萎縮、縮葉



図2 頂葉の黄化、葉巻



図3 タバココナジラミ

(2) 第2号(平成23年3月11日)

### 「オキシリニック酸剤」耐性イネもみ枯細菌病菌の発生状況について

イネもみ枯細菌病の防除薬剤の一つであるオキシリニック酸剤(商品名：スターナの名前を含む剤)に対する薬剤耐性菌は、他県で発生が確認され、本病に対する防除効果の低下が報告されています。

島根県においても、本年度オキシリニック酸剤の種子消毒で効果低下事例が発生したため、県内で採集された菌株を用いて本剤に対する耐性菌調査を行いました。その結果、耐性菌の割合が高いことがわかりましたので、技術資料を公表します。

#### 記

#### 1. オキシリニック酸剤耐性菌の発生状況

1) 平成17年～22年に採集した21圃場84菌株を耐性菌検定に供試した結果、耐性菌発生圃場率 71.4%、耐性菌株率72.6%と耐性菌率が高いことが認められた(表1)。

表1 オキシリニック酸剤耐性菌の発生状況

調査地域	調査圃場数	耐性菌発生圃場率(%)	調査菌株数	耐性菌株率(%)
松江市	14	71.4	45	71.1
出雲市	4	100	28	100
雲南市	1	100	1	100
大田市	1	0	5	0
隠岐の島町	1	0	5	0
県全体	21	71.4	84	72.6

2) なお、イネもみ枯細菌病の防除薬剤であるカスガマイシン剤(商品名：カスミン、カスラブ、ダブルカット、フタバロンの名前を含む剤)についても耐性菌検定を行った結果、全ての菌株で耐性菌は確認されなかった。

#### 2. 防除対策

オキシリニック酸剤耐性菌の割合が高いことから、健全な種子生産を求められる採種圃場では以下のような対策を行う。

1) オキシリニック酸剤は使用しない。

2) イネもみ枯細菌病の防除薬剤であるカスガマイシン剤については、島根県での耐性菌の発生は認めていないが、他県では発生が認められており、今後、耐性を発達させないために原則年1回までの使用とする。